

目次

凡例

解題

図版

峯村白斎 ···
峯村鶴雄 ···
丸山可秋 ···
関谷竜卜・山涯 ···

1 豊野資料収蔵室 峯村白斎関係資料について

平成十七年（二〇〇五）に豊野町は長野市に編入合併され、豊野資料収蔵室は、長野市立博物館の付属施設となつた。豊野資料収蔵室に所蔵される、峯村白斎関係資料の購入経緯は以下の通りである。

昭和六十年（一九八五）前後から豊野町教育委員会は、峯村白斎に着目してその掘り起こしを行つた。昭和六十三年、町民祭の特別企画展として白斎の作品展「俳人白斎展」を開催して七十余点を借用し展示した。

この展示開催と並行して豊野町文化財調査委員による白斎作品の所在調査が行われた。調査範囲は町内を中心北信一帯に及び、その結果、町内だけで二百点以上、町外を含めて総数約三百点（平成九年未現在）の現存が確認された。確認された俳句は千五百七句（平成九年未現在）に及んだ。豊野町は、平成元年（一九八九）から一年間「広報とよの」に俳人白斎を連載、翌平成二年（一九九〇）には地元の石分館が生涯学習事業の一環として冊子を発行した。

平成二年度にふるさと創生資金の一部を充てる白斎資料購入費が予算化された。

平成四年（一九九二）に郷土資料館が開館し、それを機に白斎の後裔である峯村寿一氏よりゆかりの品が寄託され、公民館や役場に寄贈されていた屏風類等と共に常設展示された。また、県外の古書業者や町内個人からの情報により、短冊や軸等を数点購入した。現在約百点が収蔵されている。

平成七年（一九九五）には町制四十周年を記念して一茶とともに白斎の句碑が豊野町内に建立され、平成八年（一九九六）には長野市吉田の何丸保存会との共催により長野東急ライフで作品展が開催された。

2 本項目の分類について

本文の順で記載している。

・作家別に、峯村白斎、峯村鶩雄、丸山可秋、関谷竜卜、山涯の順に掲載した。白斎宛ての書簡については白斎資料に入れた。

・形態別に掛軸、一枚物、屏風、書籍、その他に分類した。一枚物の中には短冊も含まれている。書籍には、刊本と手書が含まれている。

・項目については、俳画、俳句、漢詩、俳文、書簡の順に掲載した。

・掲載順は資料に記載されている年代をもとに年代順に、記載のないものについては適宜挿入した。

3 収録作家の略歴

(1) 峰村白斎について

峯村白斎は、安永元年（一七七二）に、石村（現長野市豊野町石）の百姓・峯村藤兵衛の長男として生まれる。父藤兵衛三十一歳、母きわ三十一歳だった。姉に、いく・かるがいた。幼名を清藏、のちに仙藏といった。近所の峯村久左衛門に読み書きを習い、石村長秀院の発明和尚に漢学を学んだ。俳諧は、善光寺町の戸谷猿左に学び、のちに春秋庵白尾の弟子・常世田長翠や茂呂何丸、小林一茶らと交遊した。別号は、古扇、古仙、古僊、寒岳園である。後に白斎と称した。寺子屋「寒岳園」を営み、これを庵号とした。

壯年のころ江戸小石川周辺で剃髪し、芭蕉の「奥の細道」の跡をたどって、奥州、越後、関西などを旅する。文化十四年（一八一七）『左良紫那紀行』の旅で江戸の俳人、中村確嶺が白斎宅を訪れた。吉田村（現長野市吉田）の源左衛門の娘ミナと結婚する。白斎の子どもは、文政二年（一八一九）の宗門帳では長男藤太郎・娘いし・むす・いや・のとが見える。その後せん・よかをもうけている。藤太郎は三十歳ごろに「要太郎」と改名し、天保六年（一八三五）に四十二歳で死去している。その子茂藤太も死去し、三才村から茂藤治を婿養子として迎えた。

文政六年（一八二三）十二月一日、自宅で雅会を開き、魚淵、二休ら一茶門下も参加した。

天保三年（一八三二）、善光寺へ俳額を奉納し、飯山、山田温泉、桜沢、東福寺、蚊里田、押鐘、桐原、高府、平出、福島、布野や地元の石、南郷の神社の額に選者や筆者として関わっている。同年、山田温泉薬師堂に、白斎、甘青らの俳額が奉納される。

天保九年（一八三八）、越後糸魚川一之八幡社奉額の選者をつとめた。

弘化四年（一八四七）、善光寺大地震で罹災し、家が潰れ、下敷きになつたところを救出された。それを機に門弟の鷦雄に「寒岳園」の号を譲り、嘉永二年（一八四九）自選句四百九十五句を書き留めた稿本を鷦雄に託した。「その昔なにがこぼれて花の種」の句碑が石村大日堂に建てられる。

嘉永四年（一八五二）八十賀集「那がい起くさ」が門人らの手で刊行されている。

同年十一月三十日没。享年八十。法名寒岳庵釈義敬。追善集に鷦雄編「花の佛」（明治十五年刊）「花の滴」（同十六年刊）がある。

嘉永五年（一八五二）七月発行の「海内正風俳家鑑」などの俳人番付にも信州白斎の名がある。

白斎の妻ミナは安政三年（一八五六）に八十六歳で死去した。

（2）峯村鷦雄について

文化十四年（一八一七）七月九日、南石村（南郷村境）の百姓又五郎の子として生まれる。幼名は藤藏。本名を要藏という。兄に宇兵衛、姉とのがいた。別号を寒岳園（二世）。俳諧を峯村白斎に師事し、寒岳園を受け継ぐ。

弘化二年（一八四五）の春、鷦雄は芭蕉の足跡をたどり諸国の俳人を訪ねようとした。弘化四年（一八四七）寺子屋を開き、明治六年（一八七三）まで近隣の子弟を教育した。

妻つた（石村井上氏）、長女しづ、長男栄三郎、次女つな、三女みよ、四女たのがいた。

長男は二十歳代で死去したので、山岸家から直三郎を養子に迎え、玉五郎が生まれた。

慶応四年（明治元年、一八六八）「今人俳画百人録」を出版する。寒岳園撰、碧雲庵書、松樹斎画。この年の夏、「信陽俳家為交」俳人番付に「石村鷦雄」の名が掲載される。

明治二年（一八六九）二月、弟子たちが鷦雄の句碑を南石大日堂の庭に建立する。

明治五年（一八七二）の学制發布後、鷦雄は寺子屋を閉じ、石村の栗野学校の開校に尽力する。栗野学校開校後は学校世話方として二年間つとめる。

明治十年（一八七七）、鷦雄の還暦の祝いに「むつびぐさ」が刊行される。

明治十一年（一八七八）、日詰芹田下神社の奉納俳額の選者をつとめ、以後北屋島など豊野町近隣の十五社寺の奉額に選者・筆者としてかかわる。

白斎の三十三回忌にあたる明治十五年（一八八二）一月、白斎が世を去る二年前の、嘉永二年（一八四九）に託された四百九十五句の俳句を、句集「花の佛」にまとめた。同年五月には白斎の追善句集「花の滴」をまとめた。

明治二十三年（一八九〇）十月八日没。享年七十四。

寒岳園三世は明治二十八年（一八九五）に門人の井上為泉が継いだ。主なる門人に小林舜齋、寒岳庵白鷺、北村春畦などがいる。豊野町南石大日堂に「こうこうと花のみちびく山路哉」の句碑がある。「おもかげ草」（嘉永四年）、「水むけ集」（明治十三年）、「あさがほ塚」（同上）、「糸すすき」（同二十年）「露のあかり」（同二十二年）等に入集。鶩雄の句集はないが、現在約百句が確認される。

（3）丸山可秋について

現・長野市豊野町豊野の人。丸山可秋・本名丸山高三郎（吉三郎）は天保十一年（一八四〇）二月八日に丸山喜三郎とすみの間に生まれる。別号は蓬城庵、俳諧寺。俳句は上州草津の坂上竹烟（田川鳳朗門）に師事した。

文久三年（一八六三）二月、某が可秋書画帖の序文を記している。可秋は青年時代上州沼田で杜氏の仕事をしていた。

明治七年（一八七四）一月、学制により水内郡南郷学校が開校した。このとき、丸山高三郎（可秋）は同校に招かれて「二等試補仮訓導」という資格で、月俸六円の教師となつた。可秋三十五歳、前年には長男直樹が生まれていたが、単身赴任で南郷の学校に泊まり込みであつた。児童への教育のかたわら、同村の若者たちに俳諧の手ほどきもした。和田東畠・和田耕余（豊作）などの弟子が南郷には育つた。耕余はのちに村内の同志と朝晴吟社を結成し、俳額を村内に残している。

泥の木から居を移し、極楽寺の法城庵城本普天のもとに起居するようになり、普天が豊津へ去つてからは自らの庵号を「蓬城庵」ととなえた。

明治十五年（一八八二）可秋四十三歳、南郷学校を辞し大倉学校（極楽寺）の教員として勤務する。

同年十二月六日、「極楽寺住職城本普天師を豊津村へ送る」の文を書く。極楽寺が替佐へ移転するため、住職を送別したのである。この年、芋川神社へ俳額（春湖選）を揮毫し奉納した。この額は平成十一年（一九九九）に焼失した。

明治十八年（一八八五）五月六日、可秋は、日影富士社の拝殿建設を県へ願い出る。以前からつじ山の振興策が有志によつて進められ、可秋も地元の一員として参加していた。

明治二十年（一八八七）五月、可秋が中心となり、富士社に俳額を奉納する。

明治二十一年（一八八八）五月五日、妻せつ死去。翌明治二十二年三月後妻せいを中野町から迎える。

明治二十八年（一八九五）四月二十八日、可秋の句碑「桜てふ花あればこそ国の春」が極楽寺跡（大倉学校前）に門人百余人によつて建立された。

明治三十一年（一八九八）十二月十一日、可秋の弟子小林五雲と山崎茂助、俳諧寺号の繼承問題につき相談する。

明治三十二年（一八九九）三月十一日、荒井坂（牟礼村）の俳人上野一翁、俳諧寺三世を継ぐチラシを配布する。

同月二十五日、丸山可秋（六十歳）は一茶の墓に参り、正式に「俳諧寺二世」を継ぐ報告をおこなう。また四月十六日の長野新聞紙上に、可秋の俳諧寺襲名の広告が載る。俳諧寺嗣号と追善会の支出決算は十八円余であった。

明治三十九年（一九〇六）四月三日没。享年六十七。

明治四十一年（一九〇八）三月二十日、可秋編集の「一茶一代全集」が長男直樹によつて発刊される。

昭和四十年（一九六五）十一月二十三日、可秋の句碑が現地で修復され、記念俳句大会が開かれる。

（4）関谷竜トについて

現・長野市豊野町浅野に明和四年（一七六二）ごろ生まれた。寛政から天保にかけて活動した。本名関谷滝藏。別号双松庵、准斎。

天保四年（一八三三）「斗藪雜記」に「浅野といふ所に竜トというて風流人ありと聞きて尋ぬるに、近在より此所へ出張り、豆腐、莧蒻の類ひを商ひ隠居料とせるよし。本宅へ帰りたる由にて逢はざれば」とある。寛政十年（一七九八）書画帖「とひすずめ」へ戸谷猿左に序文を請い、各地の俳人に俳画を揮毫してもらった。文化元年（一八〇四）帰郷。天保五年（一八三四）十一月五日、死去了した。法名は道淳である。

（5）「古刀器発掘之記」と山涯について

「古刀器発掘之記」は、泉平の私塾山涯塾の師匠であり、和算、漢学者である山涯（堀越作右衛門）が著したもの。明治三十五年（一九〇二）三月に鷹寺の畑で古墳の墳丘を崩したところ直刀六振、鐔二個、切羽一個、鉄環一個が出土した。「古刀器発掘之記」は出土発見の経緯から寄贈したいきさつ、寄贈された側とのやりとりを山涯が漢文体で克明に記録したものである。

(1) 「俳句手帳」

白斎自筆の俳句・俳文書留帳。表題なし。全二百十二丁現存（一部に破損あり）。

天保十四年（一八四三）閏九月ごろ、白斎は自己の半生を回顧した序文を記し、以下に自身の句と俳文を記した。一頁二句を原則に始まつたが、やがて四句から六句と次第に増えている。筆軸で丸い印を複数つけた句も多数ある。

(2) 「花の佛」

白斎発句集。明治十五年（一八八二）一月発刊。寸法は、縦十八・八センチ、横十三・三センチ。「寒岳白斎発句集 上・下」で構成され、上は春の部百七十六句、夏の部九十五句、下は秋の部百句、冬の部八十二句、白斎と鳳朗の連句など。白斎の地元の弟子たちが師の三十三回忌に編集発行した。嘉永二年（一八四九）に白斎は峯村鷺雄に対し自作の俳句を選び、一冊にまとめて授けた。これは内山紙一枚に四百九十五句を記したもので、表紙には「四時發句言屑、嘉永己酉歴俳行者自選 正月十六日」と書いてある。それを鷺雄は、自身の門弟の峯村峯雨、井上鷺跡、加藤閑性と共に明治十五年一月に「花の佛」として発刊した。

鷺雄の没後、その門弟たちは鷺雄の印鑑他五品に「花の佛」の原本、白斎自選集を加え寒岳園一世の遺物とした。この遺物は第三世が現れた時にはその全部を三世に譲渡すべきと特記されている。そして明治三十八年十一月二十五日に三世の井上助治に、その保存方が依頼された。

(3) 「那がい起くさ」

嘉永四年（一八五二）春、白斎が八十歳を迎えたので門生や俳友たちが祝いの句を贈った。

白斎は大いに喜び自ら「那がい起くさ」と題字をつけ、その句を一冊にまとめた。句は約二百五十に達している。

(4) 「長有あて白斎書簡」

翻刻すると次のようになる。

春時御同意大慶也、且としだまとして越路の珍葉（果力）被下不淺賞味仕候、御句御もらしの分隨分くおもしろく候、愚老が了簡もすこし加え上候間

御笑覧可被成候、万緒期貴眉時御礼可申述候、以上

如月廿六日 白斎

長有様

むかし誰が寝たあとならんすみれさく

隠家もめぐツて太れ春の水

御笑評

長有とは水内郡永江村梨久保の松野家七代目善左衛門のことである。

安永元年（一七七二）に生まれ、天保七年（一八三六）に没している。松野家初代善左衛門は飯山藩主から「宮内」の称を許され、七代の善左衛門も宮内と称している。またの名を晴孝という。松野家は山間地の大地主で庄屋などを務めた。この書簡は天保三年か四年の二月二十六日に長有宛に出され、白斎は長有の発句をほめている。

（5）「左良紫那紀行」に描かれた白斎

「左良紫那紀行」は文化十四年（一八一七）秋に成立した。江戸で活躍した俳人中村碓嶺の信州旅日記である。碓嶺は上州坂本の旅籠に生まれ、本庄にいた常世田長翠に入門した。長翠の移住によつて酒田で剃髪した。白斎と奥州行脚をしたこともあり、文化十四年（一八一七）渋湯から白斎の家を訪問する。善光寺に俳額を奉納した豊野町石の甘青などの句も見える。それは次のようなものである。

廿二日、晴天。しぶの湯本を出て石村の寒岳を訪ふ。此あるじはみちのく行脚せし時草に木に分て同じ道に旅寝詫びたる周ありてしばしば語りてこゝに臥ぬ。此二句は其旅中の吟也。

涼しさや翌のよくには気の付づ

白斎

尋ばや秋をきのふの白露に

白斎

（中略）

三日、四日晴天。此両日は白斎が別荘に入て、

親の親の眠り覚すなきりぐす 山柳
蜻蛉のかりそめたるか庵の前 塩長
月の夜の明るもしらず雁の声 嘉月
淋しさのあまりて月のしづか也 文水
うた、寝のゆるみや窓の秋寒き 甘青
幣たて、明るくするか秋の山 白斎

峯村白斎年譜（抄）

安永 元年（一七七二）一歳 石村の百姓藤兵衛の長男清蔵（後の峯村白斎）生まれる。

寛政 九年（一七九七）二六歳 白斎の句「古扇」の名で「さざれ石」（猿左編）に入集する。

文化 六年（一八〇九）三八歳 白斎の句、「古仙」の名で「古今綾囊」（鷺白編）に入集する。

文化 九年（一八一二）四一歳 「白斎」の名で「木槿集」（魚淵編）に入集する。

文化 十年（一八一三）四二歳 白斎、一茶・何丸らと「小松曳き」（武田編）に入集する。

文化 一三年（一八一六）四五歳 五月二十日、白斎の便りを一茶が受ける。

文化 一四年（一八一七）四六歳 八月二十二日、江戸の俳人中村碓嶺が白斎の家を訪問する。

文政 三年（一八二〇）四九歳 白斎ら石村に芭蕉句碑「古池や蛙飛び込む水の音」を建てる。

文政 四年（一八二二）五〇歳 四月、白斎、一茶らと善光寺奉納俳額の撰者となる。

文政 六年（一八二三）五二歳 十二月一日、白斎の雅会が開かれる。一茶の門人ら参加する。

文政 七年（一八二四）五三歳 白斎・何丸らの句が善光寺に奉納される。

天保 二年（一八三二）六〇歳 白斎、江戸から水戸などに遊ぶ。

天保 三年（一八三三）六一歳 白斎ら、善光寺・東福寺村中沢・山田温泉などの社寺に奉額。

天保 八年（一八三七）六六歳 白斎、義仲寺の芭蕉をめざして品川を出る。

天保十年（一八三九）六八歳 白斎、更埴市の寺沢春映に「白桃庵」の号を与える。

天保二年（一八四〇）六九歳 更科郡東福寺村の専称寺で「四景樓之辞」をものす。

天保二年（一八四二）七〇歳 白斎、半坊ノ左の江戸行きに際してその句帳に序文を書く。

天保三年（一八四三）七一歳 白斎、吉田押鐘の万刀美神社の俳額を奉納する。

天保四年（一八四三）七二歳 白斎、「安永の赤子」として文を綴り、自己の半生を回顧する。

弘化二年（一八四五）七四歳 弟子鶩雄のために、「一言一章の雅恩を報ぜよ」と一文を書く。

弘化四年（一八四七）七六歳 善光寺地震で白斎、潰れ家の下になり、危うく救出される。

弟子の峯村鶩雄、白斎の寺子屋「寒岳園」を継ぐ。

嘉永二年（一八四九）七八歳 白斎の句碑「其の昔なにがこぼれて花の種」が石村に建つ。

白斎、峯村鶩雄に自らの句四百九十五句を託す。

嘉永四年（一八五二）八〇歳 白斎八十歳の祝いに俳友らが句を寄せ、「那がい起くさ」刊行。

十一月三十日、白斎死去。法名「寒岳庵釋義敬」。

嘉永五年（一八五二）俳人番付「海内正風俳家鑑」に白斎の名が記される。

安政三年（一八五六）白斎の妻ミナ（吉田村峯屋源左衛門の娘）八十六歳で死去する。

明治一五年（一八八二）三十三回忌、白斎句集「花の佛」が鶩雄らによつてまとまる。

明治一六年（一八八三）白斎の追善句集「花の滴」が鶩雄らによつて刊行される。